

情意領域を重視した 第二言語習得理論とジャーナル・アプローチとの接点 — 外国人学習者の文化学習と言語習得の関わり —

Interactional approach using students' journalistic accounts:
Comparison with affective-oriented second language acquisition theories

倉地 曉美

キーワード：異文化理解・異文化学習、学習者援助者、対話

はじめに

筆者は以前に外国人学習者の異文化理解・異文化学習¹⁾の領域で一定の成果を挙げてきたジャーナル・アプローチを総合的なコミュニケーション能力の開発に有効な方法として、異文化コミュニケーションの視点から論じたことがある。(倉地 1991, 1992)しかしここではコミュニカティブ・アプローチとの若干の比較を行うに止まった。本稿では情意領域を重視した第二言語習得理論とジャーナル・アプローチの間にどのような原理的あるいは方法論的接点を見いだすことができるかを討究し、そこに第二言語習得のひとつの方法としてのジャーナル・アプローチの可能性を探り出してみたい。

情意的側面を重視した第二言語習得理論

第二言語習得理論の分野において、認知学習偏重への反省から、従来顧みられなかった情意 (affect) の問題が重視され、本格的な研究がはじまったのは、1970年代の事である。例えば Dulay & Burt 1977 の創造的構築モデル (Creative Construction Model) の中にはフィルター (filter)、又は情意的フィルター (affective filter) の概念が組み込まれている。彼らは言語的なインプットがオーガナイザー (organizer、又は認知的オーガナイザーとも呼ばれ、Chomsky の LAD に相当し、新しい言語体系を無意識的に組織化する装置) に到達する前に、フィルターと呼ばれる情意因子の働きでインプットが無意識的に制御されるという考えを導き出している。フィルター、すなわち動機づけ、態度、ニーズ、感情の状態といった学習者の心理作用体系の一部をなす情意因子は言語習得の速度や内容に重大な影響を及ぼ

すと考えられる。例えば学習者の第二言語習得や教室環境に対する不安度が高い場合や、自信がない場合、情意的フィルターは高くなり、言語習得が大きく阻まれる。逆に学習者のセルフ・イメージ (Krashen 1981) が高い場合、情意的フィルターは低下し学習者の言語習得は促進され、第二言語の学力は高くなるという。

周知の通り、このフィルター仮説を立論の拠りどころにしているのが Krashen の Natural Approach である。ナチュラルアプローチでは第二言語習得の教室活動においては学習者の情意フィルターを低くするように工夫しなければならないことが指導の原則とされている。そしてフィルターを低くするためには、

- (1) 学習者の興味をそそるような話題に教育活動の焦点がおかれること。
- (2) 学習者を励ますことによって、自分の考えや意見、感情や希望などを表現できるようにさせること。言語習得につながるような学習環境を作り出すこと (その具体的な方法として、伝達に支障をきたさない限り、発話の誤りを訂正しないことなどが含まれる)。
- (3) 不安が少なく、教師と学習者とのよい関係、学習者同士の親しい関係があることが不可欠であると考える (Krashen & Terrell 1983)。

一方、Humanistic Approach (Moskowitz 1978、縫部 1991) は C. Rogers に代表される Humanistic Psychology の主張、すなわち人間行動の基本に感情があることを重視し、人間形成、自己実現を終局的な目標にする考え方に拠るところが大きい。Humanistic Approach においては cognitive domain (認知的領域) affective domain (情意的領域)、interpersonal domain (対人関係の領域) の三側面が

人間中心の教育に不可欠なものとなされ、教室での具体的な教育活動の方法として、情意から入って認知に向かうアプローチ、認知から情意の方向に向かうアプローチが示唆されている。

その他、Gattegno の Silent Way (1976)、Asher の TPR (1977)、Lozanov の Suggestopedia (1979)、Curran の Counseling Language Learning (1976) など情意の問題(或いは情意因子)が第二言語習得に与える影響を十分に配慮した教授法である(名柄、茅野、中西1989)²⁾。近年、こうした外国語習得理論が日本語教育の分野にも紹介され、様々な教育現場で導入されるようになった。したがって各々の教授法の特徴や課題については、改めて解説するまでもあるまい。(峯岐 1987、三枝 1987、竹田 1987、山本 1987、川口 1989、高見沢 1989、名柄、茅野、中西 1989)。とりあえず、ここでは、後の議論のために、情意領域を重視した言語習得理論を概括的にとらえ、それらに共通する2つの問題点を指摘しておきたい。

まず第一は、情意的側面を重視した言語教育理論の多くが70年代の心理学理論の影響を受けており、認知(知覚・認識)、情意(感情・情動)、行動(行為・意志)を明確に区分する心理学の古典的な三分論(trichotomy)が多分に反映されている点である。三分論は一見理に適っているようではある。しかしよく見れば Natural Approach や Humanistic Approach で情意的側面(因子)としてとらえられているもの——第二言語学習者の自信、アイデンティティ、態度、ニーズ、動機付け、学習/新規な学習環境への不安度はそのどれ一つをとっても知覚活動(認知)との連動を抜きにしては考えられない。例えば Humanistic Approach では学習者に自分の好きな名詞、形容詞、副詞、動詞などをあげさせる作業を情意的な活動とみなしている。しかしこの作業が知覚作用(認知)を伴わずして遂行されるはずはない。人間の心的作用の実相は本来統合的(ゲシュタルト的)なものであり、知覚、情意、行動(意志)の三要素に分割されたものが独立的に機能しているわけではない³⁾。このような見地からみれば、一連の情意重視のアプローチが従来の認知学習偏重の言語教育の考え方を排し、情意の重要性を強調しようとする余りに陥ったと思われる、人間の高次の精神作用に対する要素主義的なとらえ方に疑問を呈さざるを得ないのである。

第二に、情意領域を重視する言語習得理論では確

かに教室活動の中に生じると思われる心理的障害の排除、教室内の対人関係(ラポール)についての配慮は十全になされている。しかし多くの外国人学習者にとって、教室を離れた外界との接触によってもたらされる文化的アイデンティティの揺れ、日常生活の実体験を通して形成される自文化(母語)・目的文化(目標言語)に対する価値や態度(イメージ、偏見、ステレオタイプ、学習意欲、意思疎通や相互理解への欲求など)が第二言語習得にもたらす影響は極めて大きい。にもかかわらず、その点に関して Natural Approach や Humanistic Approach は先行研究を追認するにとどまっている⁴⁾。しかしこの問題が言語習得に及ぼす重要性を鑑みれば、それに対する具体的な対処法を講せずして、「異質なものを尊重しあえる対人関係」や文化を越えた相互理解のためのコミュニケーション能力の養成を実現することは難しいのではないかという疑義が生じるのである。

ジャーナル・アプローチ

ジャーナル・アプローチは日本語の初中級から上級レベルの学習者を対象に、長期間継続的に日本事情科目のコースワークの一環として実施されてきた学習活動の一つである。そこでは学習者と学習援助者(学習者の自己実現につながる〈文化〉学習を援助する存在)とがジャーナルと称するノートを媒介したインタラクション(相互交渉)を核として相互に自他理解、自他の〈文化〉理解を進めていく。ここで言う理解とは認知的理解の意ではなく、まさに知情意一体の統合的理解(cognitive-affective-ennactive understanding)を意味する。ジャーナルを始める前に受講希望者には充分オリエンテーションを行い、活動の目的と方法を説明し、受講者にはジャーナルと称するノートを一冊準備させる。学習者には提出日をあらかじめ提示しておいて、提出期限までの間に日本語で自由記述させる。学習援助者には提出日にこれを回収し、読後学習者の記述の後に必ず某かのフィードバックを行い、速やかにノートを返却する。学習者は次の回収日までの間、返却されたノートに新たな記述を行う。フィードバックを行う際、学習援助者は学習者の記述に対して評価や添削を一切行わないことを原則とする。ジャーナル・アプローチは幾つか他のアプローチと平行させながら一定期間の間、学習者と学習援助者との1対

1のやりとりの中に進められる。言うまでもなく、ここで学習援助者が果たす役割は重要である。学習援助者が、ジャーナルという私的な世界を学習者と共有する以上、学習者との間にラポール（信頼関係）を確立させなければならない。そのためには、権威主義的・教義的な態度で学習者に接することを避け、学習者の視点に立って一人一人のおかれている立場や状況を常に把握できるように努めること、学習者が安心して自己開示できるような空間（ジャーナル世界）を作り出すことが不可欠となる。ジャーナル・アプローチの目的は以下の4点に大きく集約される。

(a)学習援助者との密度の高い相互交渉の中で学習者の不安を取り払い、何でも言える精神的な緊張感の少ない状況を作り出すこと。

(b)また現実の異文化生活の中で学習者が遭遇する諸問題に対する具体的な問題解決能力（見方、対し方）をジャーナルを媒介とした〈対話〉の中で発見学習的に培うこと。

(c)学習者－学習援助者のインタラクションによって、自他や自他の文化に対する視野を広げ、相互理解への内発的動機付けを促すと共に、相互理解に不可欠と思われる自己表現能力（コミュニケーション能力）を拡大させ、異文化での自己実現や全人的成長に導くこと。

(d)異文化社会のマイノリティとして抗しがたいシステムに組み込まれ、主流文化の流れに押し流されるだけの無力な存在として自己を認識するのではなく、可変的な文化創造の過程（人類共通の共生への永続的な課題認識、共存に必要な知恵や新しい価値創造を含む）に能動的に参入・貢献できる力（意欲、判断力、思考力、意思伝達能力、行動力、人格形成など）を養うこと。

情意重視の第二言語習得理論と ジャーナル・アプローチとの接点

それでは、情意的側面を重視した第二言語習得理論とジャーナル・アプローチとの接点はどこにあるのか？ここではまず Natural Approach とそれとを対比させるところから考察を進めてみたい。

既に Natural Approach のところで列挙した(1)の「学習者の興味をそそるような話題に焦点をおくこと」については前の章の(b)で述べたジャーナル・アプローチが学習者の自由記述を活動の中心に据えている点に対応している。もちろんジャーナル・イン

タラクションを進める中で学習援助者から学習者に対して新しい話題を提供することもある。しかしその場合、学習援助者は決して自分の書きたいことを勝手きままに述べるのではなく学習者の興味や関心に即した話題を提示すべきであることは言をまたない。

Natural Approach の(2)の「学習者を励ますことによって学習者の自己表現を可能にする」という点は、ジャーナル・アプローチが「学習者の記述に見られる過ちや問題点を指摘することは避け、インタラクションの中に自己表現の喜びと自信を得ることができるような環境を作り出し、学習者の自由な自己表現への動機付けを促していること」に対応する。(前の章の(c)参照)

(3)の「不安を少なくし、教師と学習者がよい関係を保つこと」については、ジャーナル・アプローチがラポールの確立を活動の大前提としている点に相当する。(前の章の(a)参照)

ジャーナル・アプローチの(d)の「異文化への主体的な参加、さらには文化創造の過程（共存・共生への新しい価値の創出等）に向けて自己投入できる能力や自信を育てる」という点に関して Natural Approach は積極的かつ具体的な提言を行うには至っていない。

ところで、ジャーナル・アプローチは一見書くことだけに偏っているような活動ともみえるが、ジャーナルを書くという行為の中には学習者が、学習援助者の記述（言語的なインプット）を読んで理解するという操作が自ずと組み込まれている。（しかも、学習援助者のフィードバックは一人一人の学習者にとって無関心ではいられないものである。）換言すれば、ジャーナル・インタラクションの課題性そのものの中に、「教師（学習援助者側）が書いた学習者の現在の能力レベルよりも少し高いレベルの $i + 1$ （ i は学習者の能力レベルで、 $i + 1$ は少し上の段階）のインプットを contextual inferencing（文脈を推量すること）によって理解させる」（Krashen 1982, Krashen & Terrell 1983）機会が常に開かれていることが明らかになる。ここに、ジャーナル・アプローチと Natural Approach のインプット仮説との接点を今1つ見いだすことができるのである⁹⁾。

また教師と学習者の信頼関係を重視し、ラポールの確立によって学習者の不安を減じ、学習に最適な教室環境を作り出すという点は Natural Approach だけでなく、すべての情意重視の言語習得理論と

ジャーナル・アプローチに共通するものである。さらに、「教師が学習者に対してカウンセラーの役割を果たさなければならない」といった Counseling Language Learning や Humanistic Approach の考え方や、「教師と学習者のインタラクションが深まる中で学習者が人間的成長を遂げれば、教師と学習者との役割転換 (role-reversing) も生じるという Counseling Language Learning の考え方もジャーナル・アプローチ (可変理論) のコア・インタラクション (学習者と学習援助者の相互交渉) の発想に通じると思われる。

このように方法論的類似性の側面だけから見れば、次のような推論が導き出せるかもしれない。すなわち、情意的側面を重視する言語習得理論の有効性が容認されるとすれば、〈異文化〉学習のための方法論であるジャーナル・アプローチも、(Krashen の言葉を借りるならば)、「学習者の情意的フィルターを低下させ、目標言語のインプットを入れやすくする」という点で第二言語習得に寄与するところがあるのではないかと。

情意重視の第二言語教授法と ジャーナル・アプローチとの相違点

しかし早急な結論に至る前に、ここでジャーナル・アプローチと既に述べてきた Natural Approach を初めとする情意領域を重視した第二言語習得論との原理的な相違点を明確におさえておく必要がある。ただし紙幅の都合上、本稿では次の二点についての指摘に止める。

その一は、文化理解・文化学習の捉え方の相違である。ジャーナル・アプローチのそれは、可変理論の「異文化の統合的理解 (cognitive-affective-ennactive understanding) (倉地 前掲) という概念に集約される。敷衍すれば、可変理論は認知、情動、行為を分割する要素主義を排し、〈文化〉理解 (言語習得も包摂する) の心的ダイナミズムを知・情・意の統合的形態 (ゲシュタルト) と見るのである。したがって、可変理論ではフィルター装置 (フィルター仮説) という概念や、情意から入って認識に至るとか、あるいは認識から初めて情意に向かう (Humanistic Approach) といった発想は三分論から導き出される所産 (概念的な指定) にすぎず、現実の意識作用 (統合的な心理作用のダイナミズム) のありように相即するものではないと考える。ひと

つの例を挙げてみよう。ジャーナル・アプローチでも Natural Approach 同様、学習者の記述の誤りを直接訂正しないことを原則としている。しかしそこでのそれはあくまで〈文化〉の「統合的理解」という大きな目的にむけて知情意一体の心理作用を活性化させるために設けられた原則であって、情意的フィルターを低くするためではない。

第二の相違は両者の目的にある。言語習得理論の中でも Humanistic Approach や Silent Way や Counseling Language Learning などは、学習者の言語技能の上達や言語運用能力としてのコミュニケーション技術の向上だけを目標にしている訳ではない。そこではジャーナル・アプローチ同様、人間的成長や潜在能力の発揮といったことが終局的な教育目標に掲げられているのである。しかしその場合、学習者と目標文化 (言語) の関わり (直接的、間接的関わりや、パーセプションレベルでの関わりなど) や対人関係によって齎される様々な心理作用 (ステレオタイプや偏見の形成、文化的アイデンティティの問題、自他文化への態度や価値観など) が教育目標の遂行を大きく左右するが、その点について上記の言語習得理論は何ら建設的な示唆を与えてくれるものではない。翻って、可変理論では文化を越えた相互理解のための異文化学習 (第二言語習得)、ひいては学習者の成長をも阻む隘路をどうすれば打開し得るのかというところまで議論を進め、突破口を開くための具体的な対応策 (ジャーナル) を提示し、それを教育実践につなげているのである。

たしかに「異質なものを理解する」という意味での異文化理解の重要性についてならば Humanistic Approach の議論の中でも随所に指摘されている。しかし、なにが異質なのかという問題もさることながら、現実問題として、互いの違いを伝達し合うことによって相互理解 (無論どのレベルの理解を目指すかにも拠るが、人間的成長につながるような相互理解という意味ならば) が深まるとは限らないし、違いを認めあえば、心と心の交流ができるという保証はない⁶⁾。よしんば特別に統制された理想的な外国語学習の教室環境の中ではそれが可能になるとしても、一步教室の外に出れば、外国人学習者の多くは否応なしに価値や利害が対立する異文化の厳しい現実さらされる。その時に、教室で学んだ相互理解の方法が果して異文化社会での現実にとどの程度通用するものだろうか。そこに continuity (一貫性) の問題が残されるのである。

それに対して、ジャーナル・アプローチでは、(ア)多様な価値が交錯する異文化社会の中で、学習者が現実には遭遇している様々な問題に対する問題解決の糸口（問題のとらえ方や処し方）を〈対話〉の中に見つけ出していくこと。(イ)そしてこの〈対話〉によって、かけがえのない自他の存在を発見し、互いの存在やその背景にあるものを尊重しあうことの重要性を認識すること。(ウ)一人と一人の intercultural dialogue としての〈対話〉が、数多くの〈対話〉への突破口となること。(エ)対話の中に、共生・共存していくための新しい価値（知恵）を模索し、創造することのできる能力を養うことが追求される。人類共通の課題達成に向けて、各々がもち得る潜在能力を十分に発揮し、共に生き・生かされる時にこそ真の自己実現への道が開かれるのであり、ジャーナル・アプローチはその可変理論の目的を具現化するための一つの手立てである。可変理論が目指しているところの異文化間教育は自他の文化の異文化性をきわだたせ、それを教え込んだり、違いを認識するための教育ではない。そこでいう文化教育とは人間相互の「統合的理解」に不可欠な言語習得（総合的なコミュニケーション能力の開発）をも包めた広義の〈文化〉教育なのである。

言語習得と文化学習の接点

本稿ではジャーナル・アプローチ（あるいは可変理論）と情意重視の言語習得理論を対比させ、両者の相違や接点を明らかにしようと試みた。これに対して「ジャーナル・アプローチは文化学習の理論ではあっても、応用言語学理論によって構築された外国語の技能習得を第一義とした方法論ではない。従ってそれを言語教授法と対照させ論じること自体がナンセンスである」という批判があるかもしれない。しかしながら両者が人間の学習、教育に関わる理論だという点で、一つの大きな共通基盤に立脚しているということは打ち消しがたい。従来、外国人学習者の言語習得と文化学習の間には関連性があると言われてきた。言語教育の現場では両者の相乗効果が自明とされ、文化的情報・知識の供与が盛んである。しかし、例えば、異文化に居住する外国語・異文化学習者の言語習得過程と文化理解（学習）の過程の間にはどのような関係があるのか、様々な研究の成果はあっても、未だにその根本的なメカニズムは説き明かされていない。言語習得と文化学習の過程で

は学習者固有の高次精神作用が機能し、それによって両者の関係性は、複雑なものとなる。実際、教育現場では「相乗効果の神話」を突き崩すような現実が後を断たない。異文化学習への障害が言語習得を阻む原因を作り出している例や、その逆の例は枚挙にいとまがない。学習者の文化学習と言語取得をめぐる諸問題を根本的に見直し、これを解明するためには、既存の学問領域の枠組みにとらわれず、様々な分野の研究者が共通の基盤を模索し合いつつ、学問体系の再構築を目指すという共同作業を通して、言語と文化の複雑に絡み合った糸を少しずつ解きほぐしていく取り組みが必要となる。

小論では、言語取得理論の領域に越境して、ジャーナル・アプローチとそれとの対比を試みたが、それは決して理論の深淺や方法論の優劣を論じるためではない。本稿の企図するところは領域主義を越え、言語習得と文化学習についての研究を深めることの重要性を示唆し、関係者間に豊穡な対話の地平が開かれるよう問題提起を行うことに尽きるのである。

結びに代えて

もとよりジャーナル・アプローチは、それ一つですべての学習者の第二言語習得や文化理解を促進させるような万能薬ではない（倉地 前掲）。しかしそこに従来の言語教授法では提供されなかった第二言語習得に関わる新たな視点や、問題解決への手がかかりが包含されている限り、今後さらなる実践と検討を加えていく必要があると考える。

外国人留学生教育において言語習得と〈文化〉学習の問題は常に複雑に絡み合い、両者渾然の様相を呈している。したがって、もし第二言語習得の方法論としての可能性をジャーナル・アプローチの中で追求しようとするならば、学習援助者たるものはこのアプローチが学習者の人間成長や文化学習過程の問題と密接に関わっていることを十分に認識した上で、慎重にインタラクションを進める必要があるだろう⁷⁾。しかし、第二言語習得と文化学習の過程で学習者の心理を揺さぶるさまざまな問題を察知し、それに対処し得る能力といったものは、決してジャーナル・アプローチを遂行する者だけに求められるわけではなく、異文化間交流や言語・文化の教育に携わる者すべてにとって、避けては通れない課題であることに違いはあるまい。

付記：1993年夏季の、文化庁主催の日本語教育研究協議会の第二分科会の『文化的側面を重視した日本語教育』と称するセッションの中で文化と言語（日本語）の問題がとりあげられている。また、(財)国際文化フォーラムも異文化間教育学会に『日本語の習得と文化の理解』を研究を委託し、93年秋より共同研究プロジェクトが開始される運びとなった。この問題に対する国内での組織的なレベルでの取り組みは、まだようやく始まったばかりである。

注

- 1) 筆者がいう文化・異文化は静態的側面のみならず可変的な側面を含んだ概念である。また、ジャーナル・アプローチは内外の異文化間教育に適用しうるアプローチとして1986年より、国内の留学生教育の現場で実践研究が開始され、1994年現在も継続実施中である。
- 2) ここに列挙した教授法は、解釈のされ方によってコミュニケーション・アプローチの一つとして考えられたり、Humanistic Approach の一種とみなされたり、固有の教授理論として並列的に位置付けられたり、取り扱われ方は様々である。
- 3) この点についての概略的な論議は廣松渉『哲学の越境：行為論の領野へ』勁草書房（1992）でもなされている。一方神経生理学の立場から小野（1993）は情動、認知、行動の脳内機構を解明し、『大脳編辺系と情動のしくみ』の中で、「情動は認知などの脳の高次機能に立脚している」と言及している。ただし周知の通り、ヒトの脳の高次機能については現時点で解明されていない部分が多い上、脳内機能は筆者の専門ではないため、ここでの議論の論拠を神経生理学の知見に求めるつもりはない。
- 4) たとえば Dulay, Burt, & Krashen (1982) は Gardner & Lambert (1972) の先行研究を追認する形で、統合的動機付け (Integrative motivation) や道具的動機付け (instrumental motivation) が言語習得に果たす影響の問題について一定の議論を行っている。さらに社会集団への帰属意識が言語習得に影響を及ぼす情意因子の一つということも認めている。
- 5) ただし、ジャーナル・アプローチの基底をなす可変理論では学習者を取り囲む多様な相互作用を重視しており、決して異文化学習が学習者と学習援助者の一対一の相互交渉だけで充足されるもの

ではないことを明示している。拙著（1992）の二つのスキーマとそれに関する議論を参看戴きたい。そこでは、コア・インタラクションについても、多数のコア・インタラクションの必要性とそれを可能にする学習援助者の養成がこのアプローチの成否を決定する重要課題であると主張している（倉地 1992）。

- 6) 文化の異質性や差異とは何なのかという議論や、差異性の認識に主眼をおいた異文化理解教育の問題点は拙著 1992を参照されたい。
- 7) ジャーナルは学生と教師の間に交わされるただの交換日記ではない。ジャーナルの具体的な展開や意味等についても、倉地（1992）を参照願いたい。

参考文献

- Asher, J. 1997 *Learning Another Language Through Actions: The Complete Teacher's Guide*. Los Gatos, Ca: Sky Oaks Publishing Co.
- Curran, C. 1967 *Counseling Learning Second Languages*. Apple River, Wis.: Apple River Press.
- Dulay, H. & Burt, M. 1977 Remarks on creativity in language. in M. Burt, H. Dulay, & M. Finocchiaro (eds.). *Viewpoints on English as a Second Language*. N. Y.: Regents. 95-126.
- Dulay, H., Burt, M. & Krashen, S. 1982 *Language Two*: Oxford University Press.
- Gardner, R., & Lambert, W. 1972 *Attitudes & Motivation in Second Language Learning*. Rowley, Mass: Newbury House.
- Gattegno, C. 1976 *The Common Sense of Teaching Languages*. Educational Solutions.
- 壱岐節子 1987「楽しい学習『サジェストベディア』」『日本語教育』61号
- 川口義一 1989「現代の教授法理論 TPR の理論と応用」寺村秀夫編『講座 日本語と日本語教育』13巻、明治書院
- Krashen, S. 1981 *Second Language Acquisition & Second Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.
- Krashen, S. 1982 *Principle & Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Krashen, S. & Terrell, T. 1983 *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*.

- CA: Alemany Press (藤森和子訳 1986【ナチュラル・アプローチのすすめ】大修館書店)
- 倉地曉美 1991「異文化コミュニケーション能力開発のために：ジャーナル・アプローチの創出とその意味」『異文化間教育』アカデミア出版会、5., 66-80.
- 倉地曉美 1992【対話からの異文化理解】勁草書房
- Lozanov, G. 1979 *Suggestology & Outlines of Suggestopedia*. N.Y.: Cordon & Brech, Science Publishers
- Moskowitz, G. 1978 *Caring & Sharing in the Foreign Language Class*. Rowley, Mass: Newbury House.
- 名柄迪、茅野直子、中西家英子 1989【外国語教育理論と史的展開と日本語教育】アルク
- 縫部義憲 1991【日本語教育学入門】創拓社
- 三枝恭子 1987「サイレント・ウェイによる日本語入門—学習者と教師にとって初日の重要性」『日本語教育』63号
- 高見沢孟 1989「新しい外国語教授法と日本語教育」アルク
- 竹田恵子 1987「TPRを利用した初級日本語教育」『日本語教育』63号
- 山本一枝 1987「CLLの応用—コミュニケーションのための学習活動として」『日本語教育』61号